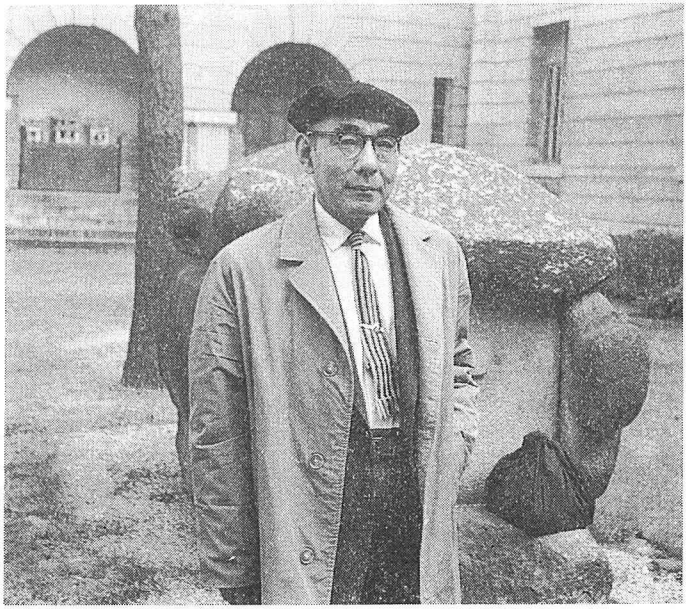

本会顧問　宮崎市定博士訃

本会顧問の宮崎市定博士は、平成七年五月二十四日午後十時三十二分、肺炎のため京都市上京区の病院で逝去された。享年九十三歳。ここに謹んで哀悼の意を捧げる。

博士は、明治三十四年八月二十日、現在の長野県飯山市で誕生された。飯山中学校から松本高等学校文科甲類を経て、大正十四年に京都大学文学部史学科東洋史学専攻を卒業、教室副手から昭和二年に岡山第六高等学校教授、同四年に第三高等学校教授、ついで同九年に京都大学文学部助教授に任ぜられ、同十九年には教授に補せられて東洋史学第二講座を担任、後に第一講座に移り、同四十年停年退官して京都大学名誉教授の称号を授けられた。

博士はその間、学内では昭和二十一年に京都大学評議員、同二十五年には文学部長、同三十四年には分校主事（教養部長）をつとめ、学外では昭和三十一年から今日に至るまで四十年間にわたって東洋史研究会の会長の任にあったほか、史学研究会理事長、東方学会理事などを歴任された。また海外においては、フランス、アメリカ、ドイツなどの大学の客員教授に招かれたほか、昭和三十五年にはモスクワの国際東洋学者会議、ストックホルムの国際歴史学会議、同三十六年にはコレジュ・ド・フランスにおいてそれぞれ講演を行い、同三十七年にはロンドン大学のS・O・A・Sより外国学者に授与される在外会員に、同五十二年にはパリのアジア協会の名誉会員に選出され、更に同五十三年には、フランス学士院よりスタニスラス・ジュリアン賞が授与された。

博士は、これらの研究、教育並びに内外の東洋史学界に尽くし

た功績により、昭和四十六年に勲二等旭日重光章、同五十八年には京都府文化賞特別功労賞をそれぞれ受章、平成元年十一月には文化功学者に選ばれた。

博士の専門は中国史研究であるが、しかし博士のばあい、中国史は古代から近代に至るまでの全時代を包括し、また研究対象も政治、制度、経済、社会、文化などの各分野にわたっている。実にさまざまなテーマについて実証的かつ独創的な論文を次々に発表して常に学界を刺戟し、斯学の発展に大きく寄与された。博士のごとく、研究が多方面にわたり、しかもそのスケールの雄大なことは、他に例を見ない程である。

博士の研究は宋代から始まる。初期の研究には王安石に関する諸研究があるが、その延長として貨幣経済の発展と通貨政策の面から近世初期の時代相を明らかにしたのが、『五代宋初の通貨問題』で、これは博士の学位論文となった研究である。この経済的関心は、その後「宋代以後の土地所有形体」や「部曲から佃戸へ——唐宋間社会変革の一面——」などの一連の論文によって、いわゆる京都学派の立場からする宋以後近世説を確立していった。

しかし博士の中国史研究の本領は、制度史研究にある。先の経済史の諸論文も制度史的な学識によって裏打ちされている点に、その独創性が認められるが、博士の制度史研究の結晶は『科挙』であり、また科挙前史と副題が付けられた『九品官人法の研究』である。特に後者はその高い学術的価値が認められて昭和三十三年度の日本学士院賞が贈られた。その他注目すべきものとしては、元代史研究の根本史料で難解で知られる「元典章」研究や、更には清代史というよりは広く中国専制君主体制研究の基礎史料である「雍正硃批諭旨」研究などは、わが国における中国史研究の水準を大きく高めたものであり、その功績は極めて多大である。

また社会史研究の分野では、その後に多くの研究を生み出す契機となった論文「中国近世の農民暴動——特に鄧茂七の乱について——」や、また近世中国の先進地域である蘇州地方の経済的繁栄の実態と士大夫、民衆との関係を明らかにした一連の研究は、明代の社会文化史と経済史とを見事に結合して明の時代相を的確に指摘したものである。他には「游侠について」「宋代の士風」などから『水滸伝』をめぐるユニークな研究に至るまで、これまた枚挙に暇がない程である。

博士の研究には、その他にも中国古代の国制を都市国家として捉えようとする研究や、『論語の新研究』に代表される古典研究などがあるが、研究はまた中国史のみに留まらず広くアジア史、東西交渉史から更には日本史にも及び、斬新な見解を発表して学界に大きな反響を呼びおこしてきた。真に博士の研究の広さと深さには目を見張るものがある。

博士は、歴史家にとって通史こそ究極の目標であるとし、早くは名著『東洋における素朴主義の民族と文明主義の社会』を、ついで『アジア史概説』、『中国史』(二冊)を独自の歴史観、世界観を以て公にしてきた。通史において一家の言を打立てようとした不断の努力は、特に高く評価されなければならないであろう。

博士の膨大な量に上る業績は、平成三年十月から始まり、昨年二月に完結した『宮崎市定全集』（岩波書店、全二十五冊）の中に網羅されている。本全集こそは、宮崎史学の結集であると同時に、日本の東洋史学が世界に誇る一大金字塔であると言っても、決して過言ではない。

（永田英正　記）